

# FADO

# 15

Julho 1997

月田秀子ファド倶楽部

## TSUQUIDA HIDEKO FADO CLUBE JORNAL



月田秀子の昨日、今日、明日…

去年の夏の終りに気まぐれに蒔いた月見草が、一冬越して春の陽射しに一気に茎を伸ばし20センチほどの背丈になった5月の初めに、四つの花を咲かせました。初夏を思わせる日中のほとぼりが覚め、幾分冷たい風が吹き始めた夕闇の中、身を震わせるように咲く様子を目の当たりに見た時、仕事がなく若干意気消沈していた心が、久し振りにときめくのを覚えました。日本月見草と言って、いわゆる待宵草と同じ夜に咲く花ですが、花は、黄色ではなく、咲いた時は真っ白で、時間が経つとピンク色に色付いてくるのです。朝は濃いピンクの花びらをしっかりと閉じ、一夜の命を生き切った誇らしささえその萎んだ姿に感じるのです。月田という名前のせい、他人(?)とは思えず、大好きな花の一つです。

エッセイ集「生きるヒント」の、「悲む」の章で月見草とは、全く正反対に朝咲く花アサガオに関してこんな一文を五木寛之さんは書いておられます。

それは、あるアサガオ研究家の話です。

学生時代からアサガオがどうして朝、決まった時間にみごとな大輪の花を咲かせるのだろうかと疑問を抱いた女性がいて、その研究を大学でもつづけ、さらに研究者となって追及した感動的な挿話です。

アサガオは夜明けに咲きます。

ふつう私たちはそれを、朝の光をうけてアサガオが花を開くのではないかと考えます。

しかし、その研究家のたゆまぬ実験の結果、アサガオの花が開くためには、光とか、あたたかい温度とか、そういうものだけでは不十分であるということがわかったのだそうです。

24時間、光をあてっぱなしにしていただけではアサガオの蕾は、ついに開きませんでした。

そこに紹介されている短い文章は、実験の結果を淡々と述べたものですが、ぼくにはとても詩的な感動を覚えさせるものでした。

アサガオの蕾は朝の光によって開くのではないらしいのです。逆に、それに先立つ夜の時間の冷たさと、闇の深さが不可欠である、という報告でした。

それを読んでアサガオが妙にいとおしく、月見草がまたさらに私自身と切り離されない花となりました。

「五木寛之論楽会」の音楽ゲストとして、五月下旬、岡山、金沢、盛岡と五木さんと巡業の旅に行ってきました。金沢では、2次会で初めて五木さんに生のファドを聞いていただくことができ、そのうえ、五木さんのロシア語の詩の朗読が飛び入りで入るなど、後半に向かって盛り上がりを見せた巡業でした。五木さん曰く、「月田さん、マイナーな世界はもう十分味わい尽くしただろうからこれからは少しメジャーな世界に行こうね。」それに対して月田のとっさに出た言葉、「はい、ありがとうございます。でも、マイナーな世界には慣れましたから」。言ってしまったから、開いた口がふさがらなかった私でした。

### ポルトガルテレビ・ロケ顛末記

5月31日から、6月4日までマカオから、ポルトガル国营放送 RTP インターナショナル放映の為の取材陣が突然嵐のようにやってきて、大阪城、住吉大社、南蛮文化館での撮影となる。

大阪城では、改築間もない金ぴかの天守閣をバックに「どんな声で」、公園内の池の前で「川辺の民」、住吉大社の太鼓橋をバックに「川辺の民」、社殿では、神さんの前だからと言うことで「さながら神の」、南蛮文化館の昨年、重要文化財に指定されたと言う南蛮屏風の黒船の前で「暗いはしけ」を歌う羽目になる。

あらかじめCDから録音してきた私のファーストアルバムに合わせてロバクバクのカラオケもどき。一番大変だったのはポルトガルギターを池側忠さん。なにせ湯浅隆さんのポルトガルギターに合わせて弾かなければならない。しかも忠さん、初めて聞く演奏である。音としては、その7年前に録音したCDの音をテレビに流すと言う。私としては誠に不本意、今のほうが、ずっとましなのにといいながらも渋々承諾せざるを得なかった。けれども、何年かぶり、久し振りに聞いてみると、声に伸びがあるしなぜか新鮮で、まんざらでもない。7年たっても大して進歩していないかと思うと少々がっかり。さらに追い討ちをかけるように、衣装は着物を来てほしいと言う。着物なんて気の利いたものは持っていない。6年前リスボンでのコンサートの時着た「きものもどき」を着ることになる。敵は、勝手な日本人像を押し付けてくる。お次は、下駄を履いて、番傘をさして欲しいと言う。それだけは勘弁してもらおう。それでも撮影当日、小雨の中、黄色い折り畳み傘をさす私をうらめしげに見ながら、「番傘をおもむろに広げ、くるくる回しながら歌うと絵になるのになー」と言う。「おいおい、ポルトガルのお人よ、ファドがわかっているのかえ。マダム・バタフライじゃないんだよ。」ついに言ってしまった。

ポルトガル大航海時代の大叙事詩「OS LUSIADAS」を書いたルイシュ・ド・カモンイスの命日に因んだ祝日ポルトガル・デー(6月10日)向けの特別番組で放映すると言う。ただし、10時間番組内の15分が「日本の大阪におけるファド」の割り当てらしい。残念ながらと言うべきか、幸いと言うべきか、日本では見ることはできない。一応、ビデオだけは送ってもらうようにはした。ともあれ、久し振りにポルトガル語に浸れた3日間であった。ちなみにマカオは、香港について、1999年に中国に返還されるポルトガル最後の領土であり、16~17世紀、南蛮貿易の中継地として栄えた地でもあります。



南蛮屏風  
(部分・南蛮船)  
大阪・中津  
南蛮文化館所蔵

## ファドとの出会い、私の場合

五百蔵 弘典

私が初めてポルトガルを訪れたのは、もうかれこれ15年も前のことである。仕事で一ヵ月あまりヨーロッパの国々を回って、夜、8時、ロンドンからリスボンへ入った。ホテルに着いたときには、積み重なった旅の疲れと、まずい機内食にいささか気が滅入っていた。チェックインを済ませて部屋にたどり着くと、まず、熱いシャワーが欲しかった。バスルームに飛び込み、シャワーの栓をひねる。湯の刺すような熱さに一瞬縮んだ肌が、次の瞬間、心地よさに弾け、全身に広がる解放感・・・とは行かなかった。シャワーから出るのは水ばかり。ま、有りがちなことさ、ここはピレネーを越えたヨーロッパ・・・。しばらくは待った。依然として水。時計を見てさらに待った。5分。電話に飛びついた。声はトーンが上がっていた。

やってきたメイドは、にこりともせず、洗面所とバスタブの湯栓を全開にし、シャワーの湯栓も目一杯に開いた。

室内に響きわたる激しい水音。“物を知らぬ奴め”と言わんばかりのメイドの視線の中に立ち尽くすこと、さらに数分、やがて蛇口の回りには湯気が立ち昇り始めた。黙って踵を返すメイド、惨めさに打ちひしがれて見送る私。

やっとの思いで眠りについた私は、突然、窓ガラスを震わせる轟音に叩き起こされた。その耳を聳する機械音は容易に取まりそうにもない。時計を見ると朝の4時である。不意に起こされて痛む頭を抱えながら、音のする窓際によって外を眺める。ゴミの収集車から伸びたロボットのアームが、巨大な鋼鉄製のゴミのポケットを掴み上げ、自分の上で逆さまにし、自らのデッキにゴミを集めている。ホテルのゴミは多いのだろう、窓の下には小さな部屋程もありそうなポケットが六つも並び、作業はすぐには終わりそうもない。しかもホテルだけではなく、近隣の軒先にも同じようなポケットが幾つかづつ並んでいる。ついには眠るのをあきらめた。

ポルトガルの第一印象は最悪だった。早々に仕事を済ませてパリへ戻り、うまいワインと料理にでも有り付くか・・・。朝、ホテルのロビーで、そう思いながら私達に引合を寄せてきた会社のピックアップを待った。社長が自ら現れた。三十代も半ば。予想外に若い。

郊外の会社へ向かう車中、運転しながら話す彼の目は生きていた。「少し前までは、私達は国境を越えて、物価の安いスペインへ買い物に出掛けていました。今ではスペインから人々が買い物に我が国へやってきます。私達の経済が立ち遅れている証です。ポルトガルは、長く、歴史の果実に安住していたのです。海外領土はそれぞれに独立して離れて行きました。経済をたてな

すには、我々自身が、とりわけ若い世代が頑張らなければならぬのです。かって、私達は日本に色々とお教えしました。今や、この国を建て直すために、私達が日本から学ぶ番なのです。」

決して気負ってはいなかった。しかし、静かな情熱と自負心に裏打ちされた彼の語り口は、きびきびした身のこなしと共に、すがすがしいものを感じさせ、徐々に私の頭から寝不足の頭痛と霧を吹き払っていた。着いた会社は、十人余りの小さな会社だった。だが、若い社員達は活気にあふれていた。

前向きに生きる人達の生きざまに接する事ほど、人の心を洗うものはない。私の、ポルトガルに対する印象は一変した。現金なもので、薄暗く、じめじめして見えた古く狭い石畳の街並みも、重厚な風情と歴史の趣を見せ始める。

せっかくやって来たんだ。もっとポルトガルを知らなくちゃ・・・。そうすると、平凡な話し、私のような世代にまず思い浮かぶのは「暗いはしけ」である。

コンシェルジュに相談して、ファドを訪ねる地元のツアーに参加した。一行は十数人。ガイドが英語で話しかけるのは私一人。他はポルトガルの地方の人達なのだろうか、言葉は通じない。訪れた酒場は小さく、一行でほぼ満席となった。古びた木組みの壁。居心地の良いほの暗い照明。ワインが進み、ほのかな酔いが心地よくなる頃、白髪の年老いたギタリストを伴い、ファドが始まった。歌い手は、私が独りで座るテーブルから二メートルと離れずに居た。言葉は分からない。だが、全身を表情と化して訴えかける何かは、ポルトガルの若者に触発された高揚感と旅の疲れ、ワインの酔いが混ざって、すっかり柔らかく、人恋しくなった私の心にしっかりと沁み渡り、普段は心の底深くに眠っている人生過ぎ越し方への様々な思いと微妙に共振し、言葉を経ぬままに優しい共感の輪を膨らませた。人の持つ悲しみや苦しさは、共感のなかで優しさに生まれ変わる。その心を癒す優しさに、一時のものとは知りながら酔いしれる。いや、このひと時こそ、人が生きて行くための大切な糧・・・。

明るく前向きな若き企業家と出会ってなければ、私はポルトガルでファドを聞く機会を失い、ファドは私の中でポップスとしての「暗いはしけ」に留まっていたかもしれない。相反すると言ってもいい、しかしどこかで深く支えあっているとも思える、この二つの異なったポルトガル。私がリスボンを離れる時、この二つのポルトガルは、それぞれに生涯忘れ難いものの一つとして胸に畳み込まれていた。

時を経て、私の歩をファド倶楽部に向けさせたのは、長く胸の奥に生き続けていたこれらの思いである。そして、今、ファド倶楽部の会員であり続けるのは、月田秀子という危ういほどの感性を持つ歌い手の、深く見つめての優しさに魅せられてのことである。

### 秀子のエピソード帖 その10 明るいファド 内間天馬

ファドの哀愁が日本人の琴線に触れると言いますが、夏のリスボンの盆踊りで歌われる明るいファドなど、実に元気が出て楽しいものです。たとえば、ブルースと聞いて、暗い短調の旋律を思い浮かべる方が多いと思います。だけど、アメリカ黒人の本来のブルースには明るい長調の多くあります。日本は明治維新以来、積極的に外来語を取り入れて来ました。良く言えば、国に活力がある証拠でしょうが、行過ぎに眉をひそめる人も多いはず。その中でも筆者があまり感心しないのが、歌謡曲や演歌のタイトルにブルースを使っているもの。ブルースって、奴隷としての黒人の、生きるか死ぬか、ぎりぎりの過酷な生活の中から生まれてきたものだとしたら、安易にナントカブルースって名付けるのはどうかな。明るいブルースって、涙がもうこれ以上出ないよ、って時に「今が最低さ、これから良くなるさ、楽しい夢を見ようよ」って

言う意味だと思う。そもそもブルースって12小節って決まりがあるのに日本の歌謡曲はそれを無視してる。ところがファドにはそういう形式がないし、生まれた背景を辿ってみても、黒人のブルースのような想像を絶する過酷なもの代わりに庶民の生活の哀歓がより感じられます。だから、月田さんが彼女自身のファドとしてオリジナルなものを創造しても許されると思うんです、哀愁のファド、明るいファド、どちらでも...。五木寛之さんも言っておられました。日本人としての月田さんが持っているものと、ファドがぶつかって、新しく生まれるものを期待したい、と。で、月田さん推薦の明るいファドの紹介、♪「リスボンのにおい」♪「ピアナへ行こう」♪「リスボンにフランスは似合わない」。さあ、皆さん、CDをひっくり返して聴いてみて下さい。きっと元気が出るよ。えっ？夏のリスボンの盆踊り？そんなのあるのかなあ？

(マルシャ・ド・リスボアと言って6月のサン・ジョアン祭りの時、リスボンの各地区の仮装行列が、それに当たるんじゃないかな 月田)



# cartas

●拙著へのご感想と『月田秀子ファド倶楽部』へのお誘い、ありがとうございます。

読書というのは、なかなか骨の折れる仕事です。他人の頭の働きに付き合うわけですから、あんな本を出して、わざわざ読んでいただいた方から感想を寄せられるというのは本当に嬉しいものです。勿論、共鳴し合えるものが数多くあったとしたら書き手としてはもう何も言うことはありません。その点、歌を聴き手として楽しむというのは、本を読むのにくらべると、ずっと負担の少ない仕事ですね。歌を作り、また歌われる方は、大変な力を込めているのに、受ける側は目をつぶっていても楽しめるのですから。そんなことを考えながら、頂いたCDをまた拝聴しているところです。いわゆるながら聴きをしていると、日本人のファディスタであることを忘れてしまいがちになる。それほどポルトガル・ファドの世界がそこに広がっています。ご存じのように、何か最近の歌手は、たとえばマリア・ダ・フェーのように、妙に声をうならして歌うのが流行みたいで、どうも私たちはあれが好きになれませんでした。自分のオリジナリティを出そうとすると、色々と昔の歌手とは違う持ち味をつけねばならないのでしょうか。

リスボンにいた時、夜更けのバイシャで、アレンテージョから来たという親子（少年は中学生くらい）の流しの歌手が、路上で披露していたファドは心に滲みしました。それと、周りの聴衆の中から、中年の男が次々と飛び入りして、それがまたあの例のアルフレッド・マルセネイロの時代を彷彿させるようで、リスボン・ファドの原風景に接したような気分を味わいました。懐かしい思い出です。

『月田秀子ファド倶楽部』、早速に入会させていただきます。

今後ともよろしく願います。お元気で活躍下さい。

(東京・小峰和夫・良子)

小峰氏は、1994年から一年間、ポルトガル経済近代化の状況を知るため、リスボン工科大学に研究留学され、「ポルトガルの風」と題したエッセイ集を東洋出版から出されました。ポルトガルに興味のある方は是非一読を

●博多から帰ってみますと、ここ妃ノ川辺は桜や桃、すももの花盛り。時折うぐいすの鳴き声も聴こえてきます。先週末は一緒にさせていただき有難うございました。

実は生まれて初めての一人旅、何もかも新鮮で楽しい二日間でした。

論案会でのファド、私も含めて周囲の人達を魅了し、今も「行って良かった！」という思いです。周囲の人達の内面にまで染み込み感動を与えていることが何故わかったかって？それが解る程の熱気と手応えが感じられたのです。博多ではファド、月田さんのファドが「待たれている」「受け入れ準備が整っている」「未知の音楽、ファドへの憧れがある」そんなものを直感いたしました。土地の人々と話していても、それを感じたのです。ファドは博多で開花する時がきっと来る、そんな予感を胸に帰ってまいりました。

益々のご幸運を祈ります。また協力出来ることがあればいたします。池側さん、野上さんにもよろしくお伝え下さいませ。

“大きな開花”のためにもどうぞご自愛の程を。

(和歌山・木村千鶴子)

●『人生読本』5:40からの放送を拝聴し、テープもしっかり録りました。

『熱い想いがあればいつかきつと出来る。』を信じ『人間の栄光の歴史の影にある人々の悲しみを・無念の想いを胸に、生きていくことの素晴らしさを、私はこれからも歌い続けて行きたいと思えます。』に拍手を贈った沢山の人達の一人として、このテープを繰り返し聞くことになるでしょう。また天野山金剛寺の観月台で歌われたあのあまりにもピッタリのファドの歴史を伺い、頷いた人も多かったことと思います。

放送のあることを知らせてあった（あるいは知っていた）友人遠から感想が寄せられました。

曰く「良いお話しでしたネ。力まないで努力している感じが良いですよ。影では見えない努力をされているのでしょうか。や

はり天性の才能とハートが違うんですよネ」

曰く「ファドや月田さんを全く知らない人が聞いた場合と、知っている人が聞いたのでは受け取り方は違うでしょうけど、どちらにとっても聞きごたえあって良かったと思う」

曰く「日本語にするのがいろんな意味で難しいのは理解出来るけど、例えば日本語で歌わなくとも内容の解説のようなものを今回みたいにしてもらえれば、言葉は解らなくても歌の持つ情感と一緒に月田さんのファドへの想いもより濃密に伝わるんじゃないかな・・・」

スケジュールが過密でご多忙と存じますが、どうかご自愛ください。「月田さんのファドと月田さんの想いに触れたい」と願っている沢山の人々の為にも。

FADO JORNAL を拝読し、月田さんの活動の場が多角的に広がってきているのを感じました。ファンの一人としても嬉しいことで益々のご活躍をお祈り致します。

中西健氏の含蓄ある一文〈近くて遠い関係〉に想いを重ね、相対としての〈遠くて近い関係〉の存在を含めて月田さんはどう思われているのかと考えております。ぜひいつかお考えを伺いたいのです。

人の想いは様々でかつ多くの場合流動的なものだと思います。また言葉に文字に行動に表されたものだけが想いではないのは勿論ですが、表現しても伝わりにくく、ましてや表現されないものをおやで、〈近いか遠いか〉はそれぞれのバランスの問題なのでしょうかね？とにもかくにも何ものにも左右されない絶対的に近い想いと言うものも有る訳で・・・。「月田さんと直接お話ししたいのは山々なのですが（皆そう思っていますよね）お邪魔するのは本意ではありませんので、機会を待っております。

(東京・藤山順子)

●FADO CLUBE JONAL と大阪サンケイホールでのライブ・テープ有り難うございました。「月田秀子のポルトガル紀行」：書き出しは一寸すまし顔ですが、後半はFADOを絶唱している月田さんを彷彿させる素晴らしい、楽しい話でした。“文は人なり”を具現した文章だと思いました。

4月～6月のスケジュールに東京での演奏がないのが大変残念でした。東京での演奏会が増えることを期待しております。

NHKの人生読本は入院患者にも愛好（聴？）者が多いです。貴女のFADOへの想い、ポルトガルへの想いのたけを素直に語って下さればと願っています。後述するようにこの期間旅に出ますが、録音しておき、帰国してゆっくりお話しを聴かせて頂くつもりです。

義父が亡くなって昨日が告別式、今日届いたライブが滲いた心、疲れた体の中まで泌み透っていき、心が癒される思いでした。ありがとうございます。

暇を見つけては地中海文化圏をまわる旅を少しずつ続けていきます。今回はフィレンツェへ絵画、彫刻を見に行く旅です。滞在期間は4、5日の短い旅ですが、貪欲に美術館、博物館を訪ねるつもりです。また虫のよい話ですが、オペラも見られたらいいなと思っています。

ご活躍とご健勝をお祈り致します。

(埼玉・下村和高)



# informação

●6月9日から5日間、北海道のファンの人達に招かれて、北海道公演の段取りをつける目的もあって、小樽、札幌と訪れた。NHKの「心の時代」を偶然に聞いて、その番組の最後に流れた「難船」に魅せられた村上憲子さんが北海道でのファドの火付け役である。行く先々に、一昨年のサンケイでのコンサートのポスターが貼ってあり、私のCDが流れる歓迎ぶりに、「まるでスターみたいだね。」とてくれることしきり。長く厳しい冬のせいも、燃えるような新緑の美しさと、人々の優しさ、おおらかさに、久しぶりに、自分を取り戻したような喜びで心を一杯にして帰阪。大阪でも、心豊かに、ゆったりと生きてみたいものだと思うことしきり。要するに心の切り替えを上手にできればと…。

●7月12日、奈良の秋篠音楽堂では、激動のアルゼンチンを激しく生きた女—エビーター—と題しての映画音楽特集の中で、わが敬愛するジャズピアノの大塚善章さんと、映画「エビータ」より、「DON'T CRY FOR ME ARGENTINA」、「YOU MUST LOVE ME」の2曲を歌います。ファド以外の曲で自分の納得のいく歌を歌える機会を作ってくださいました大塚善章さんに感謝しています。ただいま、マドンナの歌を聞きながら猛練習中。

## <月田秀子のスケジュール>

7月 2日 (水)	大阪/西中島南方「三裕の館」 開演/8時	☎06-304-1745 池側忠(P.G) 野上圭三(G)
12日 (土)	東京/王子「北トピア・つつじホール」 開演/6時	☎03-5390-1221 池側忠(P.G) 野上圭三(G)
14日 (月)	山梨/中巨摩郡「レストラン・モン・ルージュ」 開場/7時	☎0552-37-6236 池側忠(P.G) 野上圭三(G)
20日 (日)	奈良/西大寺「秋篠音楽堂」—エビーター— 開演/2時	☎0742-35-7070 児玉清(司会) 大塚善章(P) 他
24日 (木)	京都/四条河原町「巴里野郎」 ①8:00 ②9:00 ③10:00 (入替えなし)	☎075-361-3535 池側忠(P.G) 野上圭三(G)
25日 (金)	京都/四条河原町「巴里野郎」 ①8:00 ②9:00 ③10:00 (入替えなし)	☎075-361-3535 池側忠(P.G) 河村真千子(P)
26日 (土)	神戸/阪急・御影「マリールイス」	☎078-842-5522 池側忠(P.G) 野上圭三(G)
28日 (月)	大阪/心斎橋「アートクラブ」 ①8:00~3回ステージ (入替えなし)	☎06-253-0827 池側忠(P.G) 野上圭三(G)
8月 6日 (水)	大阪/西中島南方「三裕の館」 開演/8時	☎06-304-1745 池側忠(P.G) 野上圭三(G)
25日 (月)	大阪/心斎橋「アートクラブ」 ①8:00~3回ステージ (入替えなし)	☎06-253-0827 池側忠(P.G) 佐野健二(G)
28日 (木)	京都/四条河原町「巴里野郎」 ①8:00 ②9:00 ③10:00 (入替えなし)	☎075-361-3535 池側忠(P.G) 野上圭三(G)
29日 (金)	京都/四条河原町「巴里野郎」 ①8:00 ②9:00 ③10:00 (入替えなし)	☎075-361-3535 池側忠(P.G) 河村真千子(P)
9月 3日 (水)	大阪/西中島南方「三裕の館」 開演/8時	☎06-304-1745 池側忠(P.G) 野上圭三(G)
12日 (金)	福井/「福井県民会館」 開場18:30 開演	☎0776-61-3150 池側忠(P.G) 野上圭三(G)
25日 (木)	京都/四条河原町「巴里野郎」 ①8:00 ②9:00 ③10:00 (入替えなし)	☎075-361-3535 池側忠(P.G) 野上圭三(G)
26日 (金)	京都/四条河原町「巴里野郎」 ①8:00 ②9:00 ③10:00 (入替えなし)	☎075-361-3535 池側忠(P.G) 河村真千子(P)
29日 (月)	大阪/心斎橋「アートクラブ」 ①8:00~3回ステージ (入替えなし)	☎06-253-0827 池側忠(P.G) 佐野健二(G)

### ■編集後記

新生姜の酢漬けを終えたところに、注文しておいた和歌山の南高梅が届く。今年は、梅酒に挑戦しようと思う。大好きな梅干しはもちろんのこと。朝日新聞関西版「WHO'S WHO」の記事の反響が大きく、当誌の定期購読申し込み、ファド倶楽部への入会希望等の問い合わせが30件ほど有り。「歌をお聞きになってから、ジャーナルを一度お読みになってから、おいおいご入会くだされば、嬉しく思います。」繰り返した私の返事。ファドに関しての情報皆無。ひたすら月田の繰言ばかり。ご容赦のほど。ご意見、ご要望、投稿等、どしどしお寄せください。(月田)

月田秀子ファド倶楽部 ホームページ

<http://www.osk.threewebnet.or.jp/~fh/fh/tsuquida/tsuquida.htm>

■月田秀子ファド倶楽部ジャーナル第15号

■1997年 7月 1日発行 (季刊:年4回発行)

■編集・発行 「月田秀子ファド倶楽部」事務局

■〒543 大阪市天王寺区味原町2-10 エヌケイビル 502号

■TEL&FAX 06-765-4808